

ロシア人士官と稲佐のラシャメンとの“結婚”生活について Временный брак между русскими офицерами и японскими «женами» в Инаса

中 條 直 樹* 宮 崎 千 穂**

はじめに

幕末・明治期の長崎におけるヨーロッパ人士官と日本人女性との一時的な“結婚”は、フランス人士官ピエール・ロチの『お菊さん』、アメリカ人ジョン・ルーサー・ロングの『蝶々夫人』、そして近年では、ロシア人ヴァレンチン・ピークリの『オキニーサンの三時代』といった小説の恰好の題材であった¹。これに関わった日本人女性は一般に“洋妾(ラシャメン)”と呼ばれ、当時この関係は、どの国のヨーロッパ人士官にもお馴染みの長崎での“慣習”となっていた。特に、旅順獲得まで不凍港を持たず、長崎を越冬地として利用していたロシア太平洋艦隊の乗り組み士官たちは、長崎市街にあった外国人居留地の対岸・稲佐に滞在して日本人女性と関わることを特別に許され、彼らには女性付きの“家”が用意されていた。ロシア軍艦入港とともに、稲佐はたくさんのロシア人で賑わい、彼らが居留地外で日本人女性(稲佐のラシャメン)と関係をもつという独特な光景が展開された。“結婚”の慣習が、どの国の出身者たちよりも大きな展開を見せていたことは、「日本の“妻”を仕入れる習慣は、第一にまさに我が水兵たちの間で実施されていた」²とロシア人自身が認めるところである。

ロシア人士官と日本人女性との“結婚”に関する研究については、これまで日本初の梅毒検査によって紛糾した露西亞マタロス休息所設立についてや士官の民家借り入れについて³、またロマノフ王朝最後の皇帝・ニコライ二世の長崎訪問の際のロマンスや稲佐でロシア人相手のホテルを経営していた道永エイが長崎の女傑として知られている⁴ものの、稲佐における洋妾の実態の解明はいまだ断片的で、ぼんやりとした全体像しか浮かび上がってはこない。ゆえに、本稿では、ロシア軍艦乗組員や義勇艦隊⁵で来日した旅行者などの旅行記、回想録などを紐解き、これまで小説のほかでは知られることの少なかったロシア人の視点から描かれた稲佐でのロシア人士官の生活の様子に注目し、稲佐のラシャメンの実態解明の一助としたい。なお、本稿では、ロシア人士官と稲佐のラシャメンとの関係について、ロシア人側の観点を重視して“結婚”の語を、またその関係にあった者を指して“夫”(ロシア人士官)“妻”(稲佐のラシャメン)の語を使用することを断りしておく。

* 名古屋大学大学院国際開発研究科教授

** 名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻後期課程

1. 稲佐とロシア人士官の“結婚”方法

1. 1. “ロシア村”と称されたロシア人だけの特別区

稲佐はロシア人に非常に好まれていた。それは、「稲佐、愛しい稲佐！これは、日本の村すなわち郊外である。そこの住民はみなほとんどロシア語を話す。そこにはお決まりのロシア軍艦の碇泊地と我が水兵たちのお気に入りの居場所がある。」⁸という文章に現れている。

長崎市街の対岸すなわち稲佐方面には、ロシア海軍病院、ドック、技術工場など、停泊中のロシア軍艦に便宜を提供し得る施設が充実していた。しかし、稲佐がロシア人に好まれ、他所とは違った雰囲気をもっていたのはそれゆえだけではないであろう。その便利さ以上に、ロシア人が独占的に滞在し、女性の提供の点で稲佐挙げてのロシア人受け入れ体制が整っていたことが何よりも特異であり、ロシア人を惹きつけたといえるのではないだろうか。

稲佐は独特な雰囲気を持っていた。ほとんどの士官が“結婚”していることを指し、「あなた方は、他にこの世のどこにも見つけ得ない日露居住区、風俗と慣習のある土地にいるのです」といわれるまでに稲佐での“結婚”は世界的にも特異とロシア人の目には映っている。稲佐での生活が「市街とは全く異なった風になされている」というように長崎の中においてさえも独自の性格を持つ場所と考えられていたこともわかる。そして、ロシア人以外の「外国人はここには受け入れられない。ロシア人だけがここでは主人であり、ロシア人が随伴する場合のみヨーロッパ人は稲佐村に受け入れられ得る。」⁹というように、稲佐がロシア人だけに開かれていることがさらに、ロシア人にとっては特別な意味を持った。外国人が稲佐へ入ろうとすると、「何だって外国人がロシアの稲佐をぶらついているんだ。」とロシア人によって喧嘩腰に追い払われる“危険”もあったようである¹⁰。その上、頻繁なロシア艦の来港に伴う事務手続き、女性の提供を含めたロシア人との商売の発展から、稲佐ではロシア語が大きな広まりをみせ、店先にはロシア語の看板が掲げられ、住民のほとんどがロシア語に慣れていた¹¹。このようなロシア語の広まりもロシア人に暮らしを快適に思わせる一因となっていたと思われる。

日本人は稲佐を“おろしや租界”と呼んだといわれる¹²が、ロシア人たちは、稲佐を“ロシア村”、“日本のロシア”、“ロシアの地方”、“ロシア居留区”と親しみを込めて名付け¹³、ロシア人にとっても稲佐は特別思い入れのある地となっていた。

1. 2. 料理屋と“結婚”の斡旋

稲佐では、ロシア人の世話をしていた女性として、料理屋の女將、諸岡マツ（ホテル・レストラン兼営「料亭ボルガ」）、道永エイ（「ホテル・ヴェスナ」と平戸小屋のホ

テル)¹⁴のふたりの名がよく知られている。これらの施設においては、ロシア人向けの“結婚”の斡旋をしていたといわれ、士官たちの稲佐での生活を満足させていた。

アレクサンドル・ミハイロヴィッチ大公¹⁵（以下、大公）の回想録には、マツの料理屋でのロシア人の過ごし方がよく書き留められている。

当時、一人の未亡人 オマチーサンという日本人女性 が長崎近郊の稲佐村にたいへんよいレストランを営んでいた。彼女をロシアの水兵たちはロシア海軍の養母のようにみていた。彼女はロシア人のコックを雇っていて、流暢にロシア語を話し、ピアノとギターでロシアの歌を演奏し、われわれにねぎと新鮮なイクラの添えられた固ゆでたまごをご馳走してくれ、彼女は店の中にモスクワのはずれのどこかにうまく場所を構えることができたかのような典型的なロシアのレストランの雰囲気うまく醸し出していた。¹⁶

マツは、「ロシア海軍の養母」との称に違わず、長い海上生活から解放されたロシア人の為に、異国の地でロシア語とロシア料理、ロシア音楽で歓待するなどさまざまな手を尽くし、「日本にいるのだということが信じがたい状況」¹⁷を大公に披露できたようである。

出されたロシア料理については、大公を歓待したときは、「ねぎと新鮮なイクラの添えられた固ゆでたまご」の他「双頭の鷲のラベルで飾られたウォッカのびん、いつものピロシキ、ほんもののポルシチ、氷塊の中に入れられた新鮮なイクラの紺色の缶、食卓の真ん中の巨大なチョウザメの肉」¹⁸が出されている。ロシア料理店の名にふさわしく、ロシア人を喜ばせるロシア料理がマツの店で提供されていたことがわかる。

ロシア人にとって、マツの料理屋が祖国にいるような心地よい場所であったことは、他にも語られている。ロシア料理やロシア語の歓待の他には、「他の民族は訪れず」、「ロシア式バーニャと玉突き台」もある¹⁹とあったり、ここへは上陸すると真っ先に案内され、店内には、「長テーブル、確かに海軍帽をいくつか、そして長らく目にしなかったロシアの調度」があり、壁には、「皇太子の肖像」が飾られ、その下の「殿下が日本を旅行された際にこのホテルへ行啓なされたことを宣する、優美な額縁にはめ込まれた銘」によってニコライ皇太子がマツの料理屋を訪れたことを新たに訪れる者に知らせ、「ロシア船の写真」や「クロンシュタットのクラブの玉突き室規則」が有効であったりしたことが、料理屋をロシアのものらしくしていた²⁰こともわかる。「絵のように美しくこざっぱりとした場所は、艦の停泊中にロシア人士官たちが落ち着くオヤーサンのホテルである」²¹と書かれてロシア人を和ませる空間であったホテルも、「オヤーサン」（おエイさん）とはあるが、年代的にエイが将校クラブに奉公していた時のマツのホテルでは

ないかと思われる²²。道永エイの名声も高く、ヴラジオストクでは、カルタ遊びなどに興じる稲佐の美女エイの話でもちきりであった²³といわれる。

そして、最も注目すべきは、これらの料理屋がロシア人士官と日本人女性との“結婚”を斡旋する場でもあったことである。これについて古賀十二郎は、料理屋の女将は美貌の女をロシア人士官に關係させたら一挙に莫大な所得を獲るので貧家の娘たちの中から姿色ある者を絶えず物色していたと料理屋の多大なる関与を指摘している²⁴。ロシア人士官相手の女性を募集する際には料理屋に「靴みがき入用」(「靴みがき」はこれらの女性の俗称)の貼り紙があった²⁵ということからも、料理屋が女性を募集していたことがわかる。

これに関してロシア人は、「オマツーサンの家 これは、日本へ遣られた船の士官たちの rendez-vous の場」²⁶ というように表現していたり、大公の場合は、「食事と娯楽のほかに、彼女はロシア人士官たちに彼らの未来の日本人“妻”を紹介していた」と書き、この際、大公は、マツが斡旋業を「心の善良さに従って行っていて、斡旋の報酬をいっさい要求せず、「われわれが日本の歓待についてよい思い出をロシアに持って帰るように彼女の及ぶ限りのすべてのことをしなければならぬと考えていた」と述べている²⁷。このようにマツの料理屋は女性を斡旋する場としてロシア人も公言するものであったが、大公の無償の斡旋という記述に関しては、料理屋が洋妾の報酬額の内から多額な手数料を差引いてその残高を洋妾に配当するという流れがあり、洋妾の口入れの世話を内職でする女がいて料理屋からは相当の手数料を、また洋妾からは謝礼を得ていたという²⁸から、これは大公という立場を考慮しての特別な采配か、あるいは大公が“妻”を“買う”といった事実を公言することを避けるために大公がこのように書いたとも考えられる²⁹。

1.3. “妻”の選定方法

諸岡マツの料理屋や道永エイのホテルで、“妻”の斡旋が行われていたゆえに、そこへ“妻”候補の娘たちが姿を見せているのは当然であり、士官たちの“妻”の選定も料理屋で行われていたようである。「分艦隊の到着までに“これらの婦人たち”は、ロシア人の間で非常に有名な二人の日本人女性 稲佐の特権的な二つのロシアホテルの女将のもとへ集ま」り、「買い手が現れると、選定が行われ契約が結ばれて事を終える」³⁰との記述があるが、これが大体におけるロシア人士官の“妻”選定方法であったと思われる、これらの女将は諸岡マツと道永エイであったと推察される。

大公によれば、クリッパー“ヴェスニク”の士官たちは、彼女のレストランで、自分たちの“妻”同伴でわれわれを歓迎する正餐をしたが、彼らは、今度は自分たちの番だとしてまだ結婚の束縛から自由な女友達たちを連れてきていて、大公たちは、「好奇心から、玩具のような日本娘たちがどのように振る舞っているのが注視した」³¹とあ

り、マツの料理屋には、先に長崎に入港していた“先輩”士官が、後から入港した“後輩”士官の為に、「まだ結婚の束縛から自由な女友達」を連れてきて、それを“後輩”士官が物色するという光景が示されている。稲佐に住むロシア人士官にとって、新たに同胞が入港すると、彼らがこの“慣習”を真っ先に利用できるよもてなすことが伝統であり、“後輩”が“先輩”に倣うことは当然とみなされていたようである。そのことは大公の次の文章でもわかる。

私はよく“妻帯している”親友の家族を訪問し、自分が独身でいる状況がまったく具合悪くなってきた。“妻”たちは、この若い“サムライ” “サムライ”とはロシア語で“大公”を意味すると彼女たちは説明した が自分個人の快適な家を持たないで他人の家庭で晩を過ごすのがなぜなのか理解できなかった。そして、私が彼らの紙細工のような家の入り口で素晴らしく磨き上げた床を汚さないように靴を脱ぎ、靴下で客間に入ると、明るい紅をさした女主人の唇に浮かんだいぶかしげな微笑が私を迎えた。「絶対に、この驚くべき身分の高いサムライは日本の“妻”の貞操を試しているのですよ。それとも、おそらく、彼は“妻”を養うにはあんまりにけちなのかしら！」 彼女たちの目からはそう読めた。

私は“妻を娶る”ことに決めた。³²

滞在当初、“結婚”していなかった大公が、“結婚”する決意をしたのは、“結婚”している友人たちの“妻”たちから、“結婚”していないのはおかしく、けちとさえもみなされて肩身の狭い思いをするからだと読める。稲佐において、このような“結婚”が慣習化していたことは明らかである。大公自身も、「ほとんど皆が日本人女性と“結婚”していた」³³と書いているが、その他にも、「水兵、主に、この港で越冬している外国船の士官、あるいはここに短期間やって来ている士官でさえ、彼らが所属する隊の汽船が港に碇泊している間を婚姻の条件とする日本人女性との内縁関係を結ぶ」³⁴といわれていたり、「ここでは、新たにやって来る士官たちは、長い間日本に碇泊している船の同輩たちをすっかり、一時的とはいえ、隣国の可愛らしい木造の家に居を構えた妻帯者とみなしている」³⁵と記され、ロシア人士官と日本人女性との“結婚”が非常に頻繁な出来事であったことがわかる。また、ロシア人がよく泊まったというホテル・エヴリカに泊まっていたロシア人に対しても、イタリア人の老主人が「日本で独身を通したいのか結婚したいのかと尋ねた」³⁶とあるから、ロシア人にとって日本人女性との“結婚”が非常に馴染みのものという印象が長崎では強く、大公が“結婚”の理由として挙げた心境も理由として説明のつくものであったといえる。

料理屋での物色が通常の“妻”選定方法であったようであるが、その実際の様子が大

公の回想録に綴られている。大公の場合、身分上特別な選定方法であったとも考えられるが、選定の様子が示されることは珍しく、注目される。

私は“妻を娶る”ことに決めた。このニュースは稲佐村にセンセーションを呼び起こし、ロシアの大“サムライ”の家令の役を演じたいと望む少女や婦人たちに“見合い”の話が公表された。見合いは、ある日に定められた。私は、過剰な華美を避けたかった。しかし、私の親友たちはことごとく、予定されている役割に釣り合うであろうどの娘にもコンクールに参加する機会を与えようというオマチーサンの願いを支持した。³⁷

マツの計らいで、“妻”の募集が大々的に行われ、“見合い”によって選ばれることとなったとある。貧家の娘たちは、ロシア人士官の“妻”を羨んでいたという(後述)から、ロシア人士官の“妻”にならざるをえない境遇にある娘たちにとっては、“大サムライ”の“妻”は魅力的な地位であったに相違ない。参加の機会を与えられた娘たちは、料理屋の役割を考えれば、実際には料理屋が日頃から士官用に物色し、用意しておいた貧家の娘たちであろう。“見合い”はどのようなものであったのだろうか。

私の未来の“妻”の選抜は、たいへん難しかった。彼女たちはみな同じだったのである。この者たちはみな、微笑をたたえて扇子をあおいでいる、言い表しがたい優美さでお茶のはいった茶碗をもった人形であった。われわれの招待に対して、やってきた彼女たちは60人を下らなかつた。われわれのうちで最も経験豊かな将校でさえ、このように優美さが満ち満ちているのを目の前にしてに途方に暮れた。私は、エベリングの興奮した顔を穏やかに見ることができなかつたが、私の笑みは“婚約者”たちにまちがって解釈された。結局、私が青色が好みであったことが私の迷いを解決した。白い花の刺繍がされたサファイア色の着物キモノを着ている娘を選ぶことに決めたのである。³⁸

集められた大公の“妻”候補は60人を下らず、大公の“見合い”は、さながら稲佐の娘たちが妍を競う“コンクール”のようであったようである。これほどにたくさんの娘たちの中から、大公は、日本の娘たちの区別がつかず、青色が好きな大公の好みに合う「白い花の刺繍がされたサファイア色の着物キモノを着ている娘」を選んだ。人生の伴侶を選ぶには安易な選択であるが、稲佐滞在中だけの“妻”選りであるという気持ちで、大公の慎重さを失わせ、ゲーム感覚ともいえる“妻”の選定を行わせたと思われる。それは、大公を取り巻く環境がすでにそういった雰囲気をもっていたことに影響されてのことだ

あろう。

この“見合い”の後の予定は、「見合いのあと、長崎に碇泊している六隻の軍艦の将校たち全員によって厳かな婚礼の宴が行われるはずになっていた」³⁹というから、“妻”を選定さえすれば、すぐに“結婚”が披露され、“結婚生活”に入っていた様子がかうかがえる。新参の士官の婚礼の祝宴は、碇泊艦のロシア人たちの楽しみのひとつでもあったであろう。

2. ロシア人士官の“結婚”生活

2.1. ロシア人士官の“家”

ロシア人士官たちは、日本人の民家に“妻”と共に寄宿した。実際は、寄宿であったが、“結婚”すると、まず「本当に大きさも調度もとても質素な、自分個人の家ができた」⁴⁰と大公が書いていたり、他にも「ここでは、各々が自分の妻と個々の家を持っていた」⁴¹と書かれているように、ロシア人にとって寄宿先は“家”と表現され得るもので、陸上に自分の“家”を持ったという感覚があったといえる。ロシア人士官の滞在中には「丘には美しい、一戸建ての日本風の家が何軒か散在していて、その辺りには時々士官の“印”である白い水兵帽がちらちら見える」⁴²というように、ロシア人士官の“結婚”生活が進行中であることが外からも一目でわかり、稲佐独自の情緒を醸し出していたようである。

彼らの生活ぶりは、独特の世界を醸し出しており、またヨーロッパと日本の融合を呈していた。「風変わりな」家庭を訪れることで「完全なる世界と大方の意見では侵されることが滅多にない仲睦まじさとを至る所で検証することができた」⁴³というように、“結婚”生活は、“夫婦”仲が睦まじく、独特で完全な世界とロシア人には感じられたようである。“家庭”は、「ヨーロッパ・日本的、あるいは別の言葉でいえば キリスト教・仏教的そしてキリスト教・神道的家庭」⁴⁴とも表現され、二つの文化の精神的な融合を感じさせるものであったようである。

このように、独自の世界を呈していた“家庭”が存在した稲佐は、ロシア人の出入りによって、「家屋ノ構造概ネ和洋折衷体ニシテ」⁴⁵といわれ、木造の洋風建築も登場し国際色豊かな街並みとなっていたようである。そのような中での日露の“家庭”の和洋折衷な雰囲気は次の記述からも垣間見ることができる。

稲佐では、この、日本とロシアという、かくも類似せず、まったく正反対といえる生活と文化の融合が奇妙にも見られる。これら日本の玩具のような家に対しあまりに大きなヨーロッパ人は、どうしても床の柔らかい畳の上に座ったり、靴を履かずに歩い

たり、日本茶を飲まなくてはならないことに慣れることができない。そう、彼らには家具、テーブル、椅子がお出ましなのである。床の畳は汚れ、我らがサモヴァールが運び込まれる。小さな日本の急須、皿、フォーク、ナイフは場を譲る。しかし、これらはみなこの玩具の家にはあまりに大きく、住居は新婚さんたちにペテルブルグの狭いダーチャを思い起こさせる。そして、奇妙にもどうにかこのロシア風調度の中に、独自の髪型で背に絹のリボンを付け、まさに、以前日本のアルバムで見た生き生きとした絵から抜け出した、優美に着こなしたたおやかな日本人女性がいる。奇妙にもどうにか部屋の椅子に腰掛け、油紙が張られた窓枠を広げて、小さなバルコニーの前で、ヨーロッパ風に植えられた小庭の棕櫚や椿を觀賞し、その向こうで舟が行き来し丸裸の漁師がかすかに動いている湾の水がきらめいている。これは、夢かうつつか？しかし、あなた方の同胞からのお茶の招待状は、あなた方に現実だと思わせる。

ピエール・ロチは、Madame de Chrysantème の中で、十分詳しくこの和洋折衷の家庭を描いた。彼の小説には、忠実なものが多い。それをもっとよく知りたいとお望みの読者の方はそれを参照ください。⁴⁶

この文章自体が、ロチの『お菊さん』の影響を多分に受けて夢想的であるが、“家庭”に関して、ロシア人の目には『お菊さん』に描かれているような“家庭”の様子が、ロシア人土官の“家庭”の様子とそれほどかけ離れてはいないと映ったととらえることができる。ロシア人と日本人との暮らしにおいては、小さな日本家屋に体の大きなロシア人土官、ロシア風調度の中に日本女性というように、人間をはじめとしてすべてが和洋折衷で、日本家屋の部屋の中には洋風家具が置かれ、さらにはロシア人に必須のサモヴァールも運び込まれていたことがわかる。この様子は、ペテルブルグの狭いダーチャ（別荘）と形容されているから、日本家屋の中になんとか“ロシア”が確立されていたようである。部屋の内部は、家によって差はあったであろうが、ヴォルコンスキー公爵⁴⁷（以下、公爵）も、「部屋に入った。床はすっかり畳に覆われていた。扉から向かって右には洗面台が、左には椅子が二つあり、そのうちの一方の上には燭台にのつたろうそくがあった。部屋の真ん中には、四角い蚊帳の下に、掛け布団、枕といっしょに布団が床に敷いてあった。紺色のモスリンであたかももう一つの部屋のように縫われ、敷き布団の上方に隅に向かって引っ張られ四本の紐に吊されていた。窓は、外から持ち上げる鎧戸といっしょに閉じられていた。私は、あたりをすべて見極めようと熟視した。特に蚊帳は興味をそそられた...。」⁴⁸と描いており、布団や蚊帳のある畳の和風の部屋に椅子という洋風家具が置かれていて、和洋折衷であったことは同じである。

このように、日本の家屋にロシアを持ちこんだというような生活がみられる一方、「我々はみな、ほとんど一日中床に座らねばならない日本の家で、最も心地よい服装、日

本の着物(ハラート)でいることにすぐに納得した。大体において、稲佐に住むと、非常に早くまったくの日本人化することができる。私は、我が家で、家具に始まり時計に至るまで断固としてすべて日本風を導入し、結果として、日本の家屋の中の洋風家具はどんな心地よさも与えず、それでなくとも小さな部屋部屋を窮屈にするだけだということを知った。⁴⁹ というような記述もみられ、着物に関してはロシア人みなそれが拒むことはなかったようであるが、さらにその他家具などすべてにおいても日本風を好んだ者もいたようである。ロシア人士官みな完全に日本風に装っていたことは、彼らの「ヨーロッパの血筋は、ただ彼らの金髪頭、“à la Boulangè”の顎髭、“à la Capoule”の髪型などにだけ現れていた」⁵⁰ という記述からもわかる。しかし、着物を着て自分自身が和洋折衷の権化となったロシア人士官の姿は、外部から来たロシア人の目には奇妙にも映り、稲佐では、「至る所で、日本の“着物”を不恰好に着て軽い日本の下駄^{サンダル}で不器用に歩くなんだか“仮装者”のようなものに出くわした」⁵¹ と評されもしている。

このような和洋折衷な生活の内部は、「西洋と東洋の闘争は、いつも後者が勝利し、ヨーロッパ人の夫のヨーロッパ的な秩序を導入しようとする試みはすべて彼らの完全なる敗北、ヨーロッパ人たちが自分の日本人の恋人をこう呼ぶような“重ねだなの小さな飾り物”の完全なる勝利に終わる」⁵² といわれる葛藤があり、ロシア人士官は、ロシア文化を“家庭”にもたらしながらも、当然ともいえる日本文化優勢の中で、それを受け入れて当時の日本としては新奇な“家庭”を創り出していたといえる。

2.2. “妻”との時間の過ごし方

次に、日本人女性と“結婚”をしたロシア人士官の一日をみてみようと思う。

“結婚”したロシア人士官には、陸に自分の“家”と呼べるものができたが、海軍士官としての規律は守らなくてはならず、自由時間となる6時以降でなければ家へ戻ることができなかったようである。大公が乗船する“リンダ”号の司令官は、われわれ若者があまりに怠惰にならないよう厳しく監督し、われわれに毎日夕方の6時まで仕事に従事させた⁵³ といったように、陸上の生活も監督された上のものであった。このような規律通り夕方6時頃に船上での勤務を終えると、士官たちは「軍用の搭載艇と舟と呼ばれる日本のボートで村に到着」し、「岸で妻が士官を待ち、彼は彼女の腕を取って家へ向かう」⁵⁴ ようである。大公の場合は、「6時半には私はもう、“家”で微小な生き物と食卓にいた」⁵⁵ というように、勤務を終えて半時後には、“家”で“妻”とくつろいでいた。このように“妻”が“夫”を岸に迎えに出ていることや大公が勤務から開放されて半時後には“家”にいることから、多くの士官にとっては、大体午後6時過ぎから“妻”との生活を始めることが日課となっていたと考えられる。

“家”に帰った“妻”と“夫”を何が待っていたのであろうか。

ここでの女主人は、おおかた年寄りの女で、必ず妻の貞節、彼への愛、彼が不在で寂しい思いをしたことを誉めそやし始め、このこと全部からして、尚更自分への情熱を鼓舞するためにも自分の愛人に何か贈り物をしてよよいのではと話をもっていく。しかし、夫はいつも同じ主題で詠われるこの一節には目もくれず、軍装を脱ぎ、日本風の部屋着をはおりながらの震えている自分の分身と会話を始めるが、彼のことばの知識には限界があるので、会話は最も紋切り型の成句、“アナチ アタクシスキ” “あなたを愛していますか” “ダソ アマクチ” “どうぞ私に接吻してください” “アナタ コボム オソブ” “あなたは散歩したいですか” の反復で止まってしまふ。そして遂に彼の知っている二、三語から成る成句の少ない手持ち量が尽きると、彼は知っているすべての単語をどのような順序になっても選り分け始め、恐ろしい戯言となり、妻にも真似させて彼は涙が出るほど爆笑するが、これは客の来訪によってのみ中断するのである。誰か妻の友達が来たときには、少し好色な調子に移りながらも会話は同じような風が続くだろう。何故に婦人たちが立腹しているのか、やはり発言者は、言葉では述べ難いため、女性ももっと謙虚な夫のところへ逃げ出すまでは名を挙げることのできないものを示し触りながら、合図などで説明する。⁵⁶

ここには、ロシア人士官を寄宿させていた家主そのものが女術のようで、いつも日課のように、“妻”を誉めそやして“夫”に贈り物をさせようとし、それに対し、家へ帰ったロシア人士官は、それを聞き流しながら着物に着替え、すぐに“妻”と戯れ始めている様子が描かれている。

“夫”と“妻”の会話に注目すると、ここでは、“妻”がロシア語を解さないのか、“夫”のほうが日本語を使っている。いつも使う決まり文句と知っている限りの単語、そしてジェスチャーを使って好色な会話をして遊んでいる⁵⁷。ロシア人士官とその“妻”となった日本人女性の間の意思疎通は、両者ともことばに達者ではないゆえに、このふたりに限らず大体このような会話の域を出なかったのではないかと考えられる。公爵の場合、彼の相手(オシカーサン)は「ロシア語を解した」⁵⁸というものの、「他の者たちよりロシア語を理解できな」⁵⁹かったゆえに公爵には日露会話集が必要と思わせた。公爵は、「会話集の助けを借りて楽しい会話を延ばそうとした」と日本人と会話をするために努力をしており、公爵と日本娘(別の娘)との会話をみってみると、「ヴァース オシカ サン コノム вас Осшька-сан коному」⁶⁰と、日本人女性の方も知っているロシア語と日本語とを組み合わせ使っていた様子がわかり、双方がお互いを理解するよう努力していたことがうかがえる。また、日本語を知らない別のロシア人士官は、“妻”は彼の言葉を全部理解しているといっているが、それは、「彼女にバンザイ(健康を祝して!)と云って御覧。彼女は、すぐに酒をサケ持ってきて

ていたのだよ。」⁶¹と説明しているように、ロシア人の片言の日本語に対して“妻”が気配りで真意を察知していたことがわかる。決まったせりふと知っている限りの日本語あるいはロシア語の単語、ジェスチャー、お互いへの気配りが彼らの意思疎通を成立させていたといえるであろう。ニコライ二世によると、士官たちの“妻”たちはロシア語を喋り好感がもてたという⁶²が、その程度は、“夫”たちの慰安に必要程度のロシア語であったと思われる。

ただ、中には、滞在期間が長く、大公のように会話に困らないまでの日本語を習得したロシア人もいた。大公は、「長崎にはおよそ2年とどまることになっていたもので、私は日本語を学ぼうと決心した。輝かしい将来の日本に私は少しも疑念を抱かなかったので、私は、もしも皇室のメンバーのせめてひとりとても日出ずる国の言葉で話せたらまったくの有益だと思った。私の“妻”は私の教師になると申し出てくれ、しばらくたつて、日本語は文法が難しいにもかかわらず、私は簡単な話題の会話ができるくらいの成句を学んだ。」⁶³というように、“妻”を日本語教師にして日本語の勉強を始めた。こうして身につけた大公の日本語の腕前は、上手であったが稲佐の方言であったという⁶⁴。このように、多くの士官が“妻”との比較的安易な会話を楽しむにとどまっていたと思われる中で、比較的長期の滞在であることや外交上の理由からであるが大公のように中には、現地との対話を試みる者もいたことがわかる。

ここで、女家主がロシア人士官に盛んに要求している“妻”への贈り物について触れておこうと思う。実際、ロシア人士官たちは、自分の“妻”にさまざまな贈り物をするのが常で、これにお金を費やしていたようである。女性には相場があり、「月に15ルーブル。“夫”は、その上、10ルーブルする個別の家を彼女に借り、衣裳を何着か仕立ててやらねばならない。そのような“妻”に要する彼の支出は総じて月に100ルーブルかそれ以上に達した」⁶⁵とあり、目安としてはあるが、85ルーブル程度は贈り物に使われていたこともあったようである。これは「ロシア人の気に入ったら、多額なる金品をもらひ、又土地家屋など購ふてもらふ者も亦少」なからず、「一二万円位から四五万円の資産を持ってゐた女は少な」^{キモノ}くなかった⁶⁶ことを裏付けている。大公の場合、「私は彼女がいろいろな色の着物を着ているときが好きで、私はいつも彼女に新しい絹の反物を持ってきてやった。新しい贈り物を見ると、日本娘は、狂ったように表に飛び出し、新品を見せるために隣人を呼び集めた。彼女にもう少し静かにするよう説得するのは無駄であった。彼女は自分の“サムライ”の寛大さがたいへん自慢だったのである。」⁶⁷というように、いつも新しい着物を贈り、“妻”はそれを自慢している。彼の身分を知って狼狽した“妻”に平静を取り戻させるためにも、「50ヤードの赤味がかつた緑色の絹を贈ることになった」⁶⁸というように特別な時の贈り物は尚更であった。公爵も、「明るる日、彼女に絹の着物を贈りました。玩具に満足した子供のようにでした。」と着物を贈っ

たり他にも彼女にお土産を買う為に店へ寄ったりし、また彼の友人のロシア人士官は、出迎える“妻”に頼まれていた香水を贈っている⁶⁹。ロシア人の記述には贈り物として着物、香水がみられるが、貧家の出身である“妻”の舶来の装飾品はほとんどが贈り物であったようである⁷⁰。このように、家主や“妻”の要求とロシア人士官による“妻”への経済的援助が稲佐に黄金の雨を降らせ、“妻”たちは貧家の娘たちの羨望の的となり、娘たちはロシア人の“妻”たらんとしたと思われる⁷¹。

さて、ロシア人士官が家へ帰り“妻”やその友人たちと戯言を楽しんだ後は、酒を飲むか、士官仲間と将校クラブでカルタ遊びなどに興じたこともあったようである。

客たちが夫のところへ帰ると、興味ある会話は一本の黒ビールに席を譲る、すなわち震えている自分の分身と別れてから主人はいつもたくさんの仲間に会え、そこで目の細い婦人たちの場所をカルタ遊びの婦人が占領するクラブへ向かい出す。この時間は、勿論テーブルに横たわっている婦人は、家にのこされた婦人たちよりはるかに大切に、時として、カルタの婦人たちの不貞のおかげで、生きている婦人は一も二もなくある夫の手から他の者の所有へと移る。⁷²

ここでは、ロシア人士官たちが集まった将校クラブでは、カルタ遊びに自分たちの“妻”を賭けていたことが示されている。また、家で宴会となった際には次のような光景もみられたようである。

夜ごとに私のところには仲間 自分の妻を伴った仲間たち が集まった。彼らの後にはまだたくさんの少年給仕が付いてきており、時折私の家は、イヴァンサンとステファンサンがお茶とカステラ(非常に美味しい日本のピローク)を配膳して途方に暮れるほど客で一杯になった。部屋の真ん中にカルタ遊び用のテーブルがそびえ立ち、妻たちは床に座り、驚くほどの量のカステラとタマゴ(卵)を貪りながらしゃべり立っていた。時折、我々を慰めようと、彼女たちはジョナキを唄った。彼女たちの唄は次のような遊びを伴っていた。一人の日本女性が唄の音頭をとり、最後のリフレインとともに、この時他の者がみな繰り返さなければならない何らかの手の振りをした。振りを間違えた女は、自分の服の何か一部を脱がなくてはならないことに成る罰ゲームをする。その後唄は続く。このようにして少したつと日本女性たちは脱ぐものがほとんどなくなってしまいうまですっかり負ける。遊びは非常に面白いとは言えない。なぜなら、その伴奏となる唄は殺人的に同じで、我々は普通、最初の時点で遊びをやめるのである。⁷³

誰かの寄宿先の部屋に仲間の士官たちが“妻”と少年給仕(筆者の所ではステパン、イヴァンと呼ばれている)同伴で遊びに来て宴会となった様子である。そこでは、カルタ遊びもでき、“妻”たちは洋菓子カステラや卵をたくさん食べることができた。そして、“妻”たちのちょんきな踊り⁷⁴が興を添えている。ここでは、否定的にとらえられているが、ちょんきな踊りは、外国船の往来が激しかった港町で流行っており、ロシア人の若い商人は出会った新参のロシア人に茶屋でのちょんきな踊りを勧め、「甲板の上を元気良くジョンキーナ踊りを踊」⁷⁵ってみせ、また市街の茶屋では、「ジョンキネ、ジョンキネ、キネ、キネ、ジョンキネ、ナガサキ、ヨコガマ、クピー・マーマ・リュスキー・シオン」⁷⁶というようなロシア人向けのロシア語版の替え歌があり、長崎のロシア人の間でも流行していたことがわかる。ここでは茶屋での遊びを“夫”たるロシア人士官たちの前で“妻”たちがやって見せていることから、ロシア人士官の寄宿生活にも、いわゆる“女遊び”で彩られる場面があったことがわかる。

ロシア人士官は、このような宴会やカルタ遊びといった遊興の極みだけで時を過ごすのではなく、集まってお茶を飲んだり、ダンスをしたり、“妻”と一緒に外出もしていた。「舞踏会や日本式のピクニック」を楽しみ、“妻”との稲佐での生活を指して、「大体において、ここでは時間が非常に楽しく過ぎ、大体において、日本を訪れたロシア人がここで過ごした時間は、彼の人生の最も快い思い出の典拠である」⁷⁷というほど、稲佐の生活は楽しいものとしてロシア人の記憶に残るものであったようである。大公は、「祝日のごとに、私たちはリキシャを雇って田んぼや古寺を見てまわり、いつも、彼女に変わらぬ深い敬意が表わされる日本料理店で晩を終」え⁷⁸、公爵は、劇場に行ったり、舟遊びを楽しんだり、みんなで山の茶屋に寄って遊んだり、また集まってお茶を楽しんだりしている⁷⁹。これらの“結婚”生活は、比較的穏やかな印象を与えるものである。

おわりに

以上、ロシア人士官とその“妻”となった日本人女性との生活の様子をロシア人の視点からみてきた。ロシア人が抱いた稲佐の印象を考察すると、“結婚”したロシア人士官たちは、家庭生活を営むというよりはむしろ短い長崎滞在中の慰安、遊興として日本女性と暮らしていたという側面が浮かび上がるように思う。

稲佐では、ロシア語が通じ、料理屋はロシア人を精一杯ロシア風にもてなし、女性を斡旋していた。ロシア人の要求で始まったロシア人と日本人女性との関係は、稲佐では莫大な利益を背景として慰安という明確な目的をもつ用意周到な女性提供体制として発展、確立した。一方、ロシア人士官にとって、“結婚”は、当然利用すべき完全なる慣習として揺るぎないものとなっていた。陸上に自分の“家”を持ち、“妻”と戯れ、常

に宴会を催してちょんきな踊りのような茶屋の遊興と変わらない遊びで“妻”に慰めてもらい、海上で禁じられているカルタで“妻”を賭けて遊んで複数の“妻”を利用することができた。

勿論、個人的な恋愛感情はどのような条件下においても発生し得、比較的滞在の長い士官の“家庭”においては、“夫婦”間の親しみもある程度は生まれたことは考えられる。みなと一緒に観劇やピクニックなどの穏やかな生活は、人身売買の現実を忘れさせる光景である。しかし、ロシア人が楽しく暮らしたという意見は、ロシア人の一方的な視点から発せられるものに過ぎない。この一見穏やかな光景や恋愛感情もまた、ロシア人士官が自身の心を和ませる為に買ったひとときのロマンスなのである。そして、ロシア人士官とその“妻”の双方が、“結婚”が軍艦の碇泊中に限る遊興目的であることを十分に心得ていたゆえに、“夫”にも“妻”にも相応の行動をとらせ、また語学力の欠如による“夫婦”間の意思疎通の不安定さも手伝って、このひとときのロマンスが長期的な恋愛感情へ発展する可能性をも妨げていたように思われる。

この“結婚”の慣習化のおかげでロシア人は稲佐に金を落とし、貧家の娘は洋妾として成功すれば裕福になれる機会を得、それゆえ中には進んでロシア人との“結婚”を望む者も現れたと考えられる。ロシア人の要求は稲佐に不都合だけをもたらしたのではなかった。しかし、大部分において、漂泊するロシア人士官の稲佐に馳せる想いとは、小説のような一時的なロマンスに対する憧れというロマンチックな大義名分の下の一時的な遊興への期待に過ぎなかったということがロシア人の“結婚”生活の様子からうかがえるのではないだろうか。当時の日本とロシアの置かれた時代的背景と、それによって要求されたものを充たすべく日本人とロシア人との接触から日本の風習を応用して生まれた現象といえる彼らの“結婚”生活は、それ自体が独特な風俗を呈し、またそれが地域全体を支配している点においても世界的に独特なものとしてロシア人の目に映った。そして、その独特な世界を十分に利用していたのはまさにロシア人であり、日本人の参加なしには成立しない世界でもあった。

註

- 1 日本人女性とヨーロッパ人男性との交渉は、結婚、同棲といった形態で、イエズス会の宣教師が初来日した時代から日本国内や東南アジアの日本町において現れていた。江戸時代になると、鎖国により唯一外国に開かれていた長崎において、中国人や出島に滞在するオランダ商館勤務の男性を相手とする遊女たちが現れた。ループによると、ヨーロッパ人の初来日の天文12(1543)年から明治維新の明治元(1868)年までの全時期を通じて日本人女性は欧米人の称賛の対象であり、彼らは日本人女性との婚姻を殆ど躊躇せず、また日本側でも外国人を対象にした婚姻や売買春が盛んで、ヨーロッパ人を相手

にした日本人女性がその後も日本人と結婚できたという。(ゲイリー・P.ループ著、庄山則子訳「一五四三年から一八六八年の日本における異人種間関係について 戦国および近世における人種混交と人種意識」脇田晴子、S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史 上 宗教と民俗 身体と性愛』東京大学出版会 1994)江戸時代の長崎の遊女についてはヨーロッパにも報告されており、ウィルキンソンは、天保13(1842)年出版の『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第7版に、「日本の女の多数が、ヨーロッパ人その他の外国人と同棲し、売春婦としての手当を受けている」と書かれていることに注目して、「おそらく長崎の遊女町の印象を日本全土に拡大適用したための誤認だろうが、このいささか遠慮のない文章が、やがてゲイシャの国、ヨーロッパ男の天国としての日本のイメージへと発展する」として、日本人女性に関する欧米人のイメージとして長崎の遊女の影響を否定しない。(エンディミオン・ウィルキンソン著、徳岡孝夫訳『誤解 日欧摩擦の歴史的解明』増補改訂版 中央公論社 1982 63頁)このような外国人男性と関係する女性に関する長崎の“伝統”は、明治時代となっても継承され、オランダ商館員や中国人以外の外国人を相手とする遊女、妾が“活躍”した。このような日本人女性の歴史を背景として、フランス人士官と彼に雇われた日本人女性との同棲生活を描いた『お菊さん』(“Madame Chrysanthème”)は、明治20(1887)年出版された。ウィルキンソンによると、実際に長崎で日本人女性と共に暮らしたフランス人士官ロチによるこの作品は、軽い文体と、「禁じられた欲望」の充足の地ですぐに手に入る従順な日本人女性の魅力、ヨーロッパでの女権拡張運動からの逃避、植民地主義的気分との合致などの理由から、ヨーロッパで広く愛読されたといい、ロチの功績を「現実的きわまる人身売買を美しいロマンスの糖衣にくるみ、日本のイメージとしてヨーロッパの読者大衆に提供したこと」としている。(前掲、ウィルキンソン。72-76頁)この作品は、さまざまな亜流を生み、長崎を訪れたことのないアメリカ人による『蝶々夫人』の誕生にも影響を及ぼした。(ブライアン・パークガフニ『蝶々夫人を探して-歴史に見る心の国際交流』かもがわ出版 2000 22-24頁)『蝶々夫人』(“Madame Butterfly”)は、明治31(1898)年に発表され、明治33(1900)年のディビット・ペラスコ監督の演劇を経て、明治37(1904)年にイタリア人作曲家ジャコモ・プッチーニによりオペラ化された。『お菊さん』や『蝶々夫人』は、その脚色で人気を呼び、幕末・明治における欧米人男性と日本人女性の交渉の独自さは欧米人の興味を惹きつけた。これらの作品のヒロインは、結果的に長崎の外国人居留区を舞台とする日本人女性の歴史を世界に広めることとなり、同時代の海軍軍人は長崎に思いを馳せることとなった。保田によると、明治24(1891)年に長崎に寄港した皇太子時代のニコライ二世も、日本までの航海中に『お菊さん』を読んでいる。(保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』増補 朝日新聞社 1990 22頁)『オキニーサンの三時代』(“Три возраста Окини-сан”)は、昭和56(1981)年に発表され、ソ連でベストセラーとなった。邦訳は、『オキヌさんの物語』(V.ピークリ著、鈴川正久、田原佑子共訳、加藤九祚監修『オキヌさんの物語』恒文社 1989年)。

- 2 A. A. Черевкова. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4. стр.108.

A. A. チェレフコヴァ 女医。義勇艦隊ペテルブルグで明治21(1888), 同22(1889)年に来日。

- 3 万延元(1860)年、“ボサドニク号”の提督ピリレフが長崎奉行の許可のもと、ロシア人

水兵だけを梅毒検査済みの遊女と接触させる為、稲佐に露西亜マタロス休息所を設立した。そもそも、ロシア側が休息所の設立を求めたのは、上陸した水兵の遊廓通いによる梅毒感染予防と風紀の取締が目的であった。ロシア側は、稲佐に遊廓を設立し、ロシア人と関係する遊女にはロシア人医師による梅毒検査を要求したが、丸山寄合町の遊廓の特権により稲佐遊廓の設立は不可能な上、遊廓側は稲佐に派遣する遊女の梅毒検査を承伏しなかった。そこで、市郷の貧家の娘を集め、籍だけを丸山寄合町の遊女屋に置く名附遊女を稲佐で整えることで落ちついた。これらの遊女は、ロシア軍艦の長崎入港から出帆までの碇泊中のみロシア人と接触し、軍艦が去ると休息所を去ったことから「臨時官許名附遊女」、「臨時官許雇女」と呼ばれている。露西亜マタロス休息所は、当初、字大道にあったが、明治3(1870)年に悟真寺付近に移転した。明治5(1872)年の娼妓解放令を受けて、翌年、長崎の遊廓地域である丸山町、寄合町の振り合いによって貸座敷となった。休息所は、外観が赤い建物であったことから、「カラスネ・ドーマ」(ロシア語で赤い家を意味するクラスヌィ・ドームの音が転じた)として有名であったという。これに対し、上級士官は稲佐の民家を借り入れた。万延元(1860)年、提督ピリレフが稲佐郷の多吉宅の物置小屋を止宿所としたのが始まりで、その後他の士官たちが次々と民家を借り入れるようになった。翌年、日本支那派遣ロシア艦隊司令官リハチエフがロシア人に限って民家を貸し渡すように申請し許されてからは、ロシア艦隊の提督から士官に至るまで概ね民家を借りて止宿所にするのが常となったという。後にこの身分の高いロシア人には、丸山寄合町の遊女も派遣され、この「ロシア女郎衆」、「士官女郎衆」の「稲佐行き」は慶應の頃に著しく増し、明治維新後も続いたが、明治5(1872)年の娼妓解放令により消滅した。この後は女性が雇い入れられ、ロシア軍艦の碇泊中のみ妾(稲佐のラシャメン)となった。(古賀十二郎の研究に基づく。古賀十二郎著 長崎学会編『丸山遊女と唐紅毛人』後編 長崎文献社 昭和43)

- 4 道永エイに関しては、郷土史家の原勇(原勇『女侠 長崎のお栄さん』原静枝発行 昭和42 伝記物語的である)や松竹秀雄(松竹秀雄『ながさきの対岸 稲佐風土記』長崎文献社 昭和60)によって知られる。ニコライがお忍びで上陸した際の相手については、定かではないがエイという説(前掲、古賀。284-285頁)、芸妓菊奴(前掲、原。174頁)という説がある。
- 5 明治11(1878)年、貿易振興の目的で創設され、来日する多くの旅行者などがオデッサーヴラジオストク、ウラジオストクー敦賀、長崎、上海航路を利用していった。
- 6 *И. Зарубин. Вокруг Азии. // Русский вестник. Спб., 1881. №5. стр. 311.*
- 7 *А. Н. Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 65. (Андрей・ニコラエヴィッチ・クラスノフ。1862-1914。地理学者、地形学者、植物学者。明治25(1892)年、同28(1895)年来日。)*
- 8 *Н. Бартошевский. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868. стр. 41.*
- 9 *А. Н. Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 70.*
- 10 *Ф. И. Кнорринг. Через Америку и Японию. Путевые очерки. Спб., 1904. стр. 268.*
酔っぱらったロシア人たちは、稲佐を遊歩していた筆者を含む者の中にロシア人がいないことに気づいて追い払おうとした。
- 11 「料理屋、居酒屋、洗濯屋、床屋、湯屋等ノ招牌八皆ナ露国語ヲ以テ記サレ渡海船ノ船頭、

小商人ハイフモ更ナリ五六歳ノ児童ニ至ルマデ露語ヲ知ザルモノナク」との記録がある。(『稲佐ト露西亜人』長崎県立図書館蔵。著者は不明だが対馬警備歩兵大隊の用箋に記され、佐土原勲寄贈とある。「去ル三十三年頃」との記述や、現今の稲佐として、ロシアの旅順経営が成ったことでロシア軍艦の出入りが減ったものの、滞在は数日ではあるがいまだ民家に宿泊する者が少なくないという記述があることから、日露戦争前の3、4年間に書かれたものと考えられる。)稲佐でロシア語が広まっていたことは、他にも多くのロシア人が書き留めていて、この記録を裏付ける。看板については、クラスノフ(A. H. Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 66.) 住民がロシア語に慣れていたことは、クレストフスキー(フェヴロド・ヴラジミロヴィッチ・クレストフスキー。1840-1895、作家。B. Крестовский. В дальних водах и странах. // Русский вестник. Спб., 1886. №2. стр. 564.) など。

12 前掲、松竹。43頁

13 “русская деревня(ロシア村)”の称はクレストフスキーなど、最も多くみられる。(B. K. рестовский. В дальних водах и странах. // Русский вестник. Спб., 1886. №2. стр. 561.) “русская сторона(ロシアの地方)”(Г. Армфельт. Корвет “Варяг” воспоминания из кругосветного плавания 1863, 1864, 1865, 1866, 1867 г. Спб., 1867. стр. 91.) “Русская Япония(ロシアの日本)”(K. Скальковский. Вокруг света. Срок шесть тысяч верста по морю и по суше. Путевые впечатления. Спб., 1881. стр. 100.) “«русская колония» (ロシア居留区)”(И. Зарубин. Вокруг Азии. // Русский вестник. Спб., 1881. №5. стр. 311.)

14 万延元(1860)年出生とされる。明治13(1880)年、マツの世話でロシア将校クラブに奉公。翌年、ロシア艦隊(艦長付きボーイの名目)でヴラジостоクへ渡り、10年後帰国。明治26(1893)年、山辺家から借地しホテル・ヴェスナを、明治33(1900)年、平戸小屋に住宅兼ホテルを創業したとされる。ホテル・ヴェスナは、設備が充実し、湾や対岸を見渡せる見晴らしのよい施設であったとされる。(前掲、松竹。エイについては150-168頁)

15 アレクサンドル・ミハイロヴィッチ大公(1866-1933)。ミハイル・ニコラエヴィッチ大公の子でニコライ一世の孫。アレクサンドル三世の従弟で、ニコライ二世の義弟(皇妹クセニヤの夫)。明治19(1886)年から同22(1889)年まで軍艦リング号で世界周遊。その際、稲佐に滞在し、同20(1887)年7月に明治天皇に拝謁。ロシア革命で亡命。回想録は、昭和7(1932)年にパリで執筆された。

16 Великий князь Александр Михайлович. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 86.

17 Там же. стр. 87.

18 Там же. стр. 87.

他の旅行記にも、「イクラ、バルイク、チーズ、ウォッカ“ポポフ”、その他のロシアの前菜一揃え」、「美味しいボルシチ、スープ、その他のロシアの食べ物」と具体的な記述がみられる。(A. H. Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 65.)

19 Хоров. От Владивостока до Одессы. // Природа и Люди. Спб., 1897. №24. стр. 383.

20 A. H. Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 65.

21 М. Г. Гребенищikov. Путевые записки и воспоминания по Дальнему Востоку. Спб.,

- 1887.стр.189. ミハイル・グリゴリエヴィッチ・グレベンシコフ 弁護士、ジャーナリスト。明治17(1884)年からウラジオストク移民当局書記。
- 22 明治20(1887)年の出版であるのに対し、道永エイのホテル・ヴェスナの創業は同26(1893)年。
- 23 М. Г. Гребенщиков. Путевые записки и воспоминания по Дальнему Востоку. Спб., 1887. стр.205.
前掲『稲佐ト露西亜人』には、士官の宿泊所として「彼ノ道永お柔いの宅八其筆頭二位スルモノニシテ同人八本邦人ノ間ニ格別ノ関係ナケレドモ能ク露語ヲ操リ苟モ日本ニ航セシ露国人就中軍人ニシテ同人ヲ知ラザルモノナキ程ナレバ從ツテ其名本国ニ聞工同国皇族来遊セラル、事アルモ必ラズ一度接見サル、勢力ヲ有シー種ノ日露近接ノ關鍵タル姿アリ」とエイがロシア人中で重要人物であったことが記されている。
- 24 前掲、古賀。283頁
- 25 長崎ユネスコ協会『稲佐の史話』平成6年5月30日(長崎ユネスコ協会開催第32回長崎の歴史に学会内容)
ロシア人士官相手の女性の俗称は「靴みがき」、それに出る時は「靴みがきに行く」といったという。(前掲、古賀。283頁)
- 26 А. Н. Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 65.
- 27 Великий князь Александр Михайлович. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр.86-87.
- 28 前掲、古賀。283頁
- 29 大公は、日本女性を“買う”といった表現は使わず、人身売買に直接言及しない。後述のように、大公が“結婚”しないのがけちであるという際にも、“妻”を「養う」という表現がなされている。
- 30 А. А. Черевкова. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб.,1889. №4. стр. 108.
- 31 Великий князь Александр Михайлович. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 87.
- 32 Там же. стр. 88.
大公は“大サムライ”と紹介されていたが、お忍びで生活していたようで、“妻”をはじめとして稲佐の住民たちはロシアの皇族であるとは思いませんに暮らしていたようである。明治天皇への拝謁のニュースで大公の身分が発覚し、住民たちは狼狽したという。(стр. 90.)
- 33 Там же. стр. 86.
保田によると、同じ皇族であるニコライ皇太子も、長崎駐在の士官がみな“結婚”していて、自分も彼らの例にならいたいことを長崎入港の日の日記に記しているという。(前掲、保田。21頁)
- 34 А. Виноградов. В дальних краях. Путевые заметки и впечатления. М., 1901. стр. 112.
- 35 А. Н.Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 65.
- 36 Н. Шестунов. Вдоль по Японии. Спб., 1882. стр. 22.
- 37 Великий князь Александр Михайлович. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 88.
- 38 Там же.
エベリングは、大公と共に巡洋艦“リング号”に乗船していた海軍士官。
- 39 Там же.

- 40 Там же.
- 41 *Н. Бартошевский*. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868. стр. 40.
- 42 *В. Крестовский*. В дальних водах и странах. // Русский вестник. Спб., 1886. №2. стр. 563.
- 43 *Д. И. Шрейдер*. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988. стр. 147. 初版は明治28(1895)年、サンクトペテルブルグ。シュレイデルは明治24(1891)年、同26(1893)年来日。
- 44 Там же.
- 45 前掲、『稲佐ト露西亜人』
- 46 *А. Н. Краснов*. По островам Далекого Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 70-71.
- 47 *ミハイル・ニコラエヴィッチ・ヴォルコンスキー* (1860–1917)。公爵、作家、劇作家。『ブーシキンスキー・スボルニク』に掲載された「オーシカーサン」は、旅行記の抜粋とされる。短篇小説のようなタッチで、読者に日本情緒とひとときのロマンスを上手く伝えていている。
- 48 *Князь М. Н. Волконский*. О-сшька-сан. // Пушкинский сборник. Спб., 1899. стр. 395.
- 49 *М. Верн*. Современная Япония. М., 1882. стр. 45-46. ヴェルン 海軍軍人。稲佐に民家寄宿滞在。
- 50 *Д. И. Шрейдер*. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988. стр. 147.
- 51 Там же.
- 52 Там же. стр. 147-148.
- 53 *Великий князь Александр Михайлович*. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 88-89. ふう、士官たちは大部分が夕方6時から自由となったようである。
(*Н. Бартошевский*. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868. стр. 41.)
- 54 *Н. Бартошевский*. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868. стр. 41.
稲佐の女性たちは、停泊中の船に勤務する自分の“夫”たる士官を迎える時だけではなく、ロシア艦が入港する際にも士官たちを群がって迎えていた。長崎を基点に航海し、何度も寄港するような状況の中で、彼らはお互いに知り合いにもなっていた。ヴォルコンスキー公爵は、「稲佐では、たちが迎えに群がり出てきました。すぐに私はオシカがないことに気づきました。友人は、自分の日本娘に会い、抱擁しました・・・。彼らはもう、初対面ではないのです。」と述べている。(*Князь М. Н. Волконский*. О-сшька-сан. // Пушкинский сборник. Спб., 1899. стр. 397.)
- 55 *Великий князь Александр Михайлович*. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 89.
- 56 *Н. Бартошевский*. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868. стр.41-42.
“ арати атакосисуки ” は “あなた、あたくしすき”、“ дазо амакч ” は “どうぞ、あまくち”、“ аната копому особу ” は、“あなた、こぼむ(こぼん) おそぶ(あそぶ)”

- をロシア語表記したものと思われる。“あまくち”は長崎の方言で接吻の意味。“こばん、あそぶ”は、“今晚、遊ぶ”か。
- 57 保田によると、士官の一人が“妻”たちをひどくからかい、苦しめたとニコライ二世が記しているというが、この士官も、このような風に好色な話で“妻”たちをからかったのではないかと思われる。(前掲、保田。31頁)
- 58 *Князь М. Н. Волконский. О-сшька-сан. // Пушкинский сборник. Спб., 1899. стр. 393.*
- 59 Там же. стр. 396.
- 60 Там же. стр. 399.
“*вас*”は“あなた”の意。従ってこの文は“オシカーサンはあなたが好き”という意味になる。
- 61 *Д. И. Шрейдер. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988. стр. 148.*
乾杯の際に使う“*ваше здоровье!*”(“健康を祝して!”の意)という表現を、“万歳”と日本語に訳し、“妻”にお酒を持って来ることを促している。
- 62 前掲、保田。31頁
- 63 *Великий князь Александр Михайлович. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 89.* 大公にとって、明治天皇拝謁は、自分の語学力を外交の場で役立てるチャンスであった。大公は、天皇が外国語を話さないと聞き、「私が通訳なしで話すことができたらみんなへの思いがけない大きな贈り物になると思われた」と期待した。(стр. 90.)
- 64 明治天皇に拝謁した際、大公は皇后美子に稲佐で友人と話すような表現の日本語で話しかけた。すると、皇后をはじめとしてそのテーブルにいた人はみな笑い出した。首相は大公を送る馬車の中で、大公の日本語教師の“妻”の名を尋ね、天皇の名で稲佐方言の輝かしいほどの教授法に感謝の意を表したいと述べたという。(*Великий князь Александр Михайлович. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр.91.*)
- 65 *А. А. Черевкова. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4. стр. 108.*
- 66 前掲、古賀。284頁
- 67 *Великий князь Александр Михайлович. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 89.*
- 68 Там же. стр. 90.
- 69 *Князь М. Н. Волконский. О-сшька-сан. // Пушкинский сборник. Спб., 1899. стр. 396, 397,398.*
- 70 古賀によると、「美貌ある女たちは、概ねロシア海軍士官及び将校の妾となり、従前着用せる遊女衣裳をぬぎ捨て、髪を束髪風に結び、西洋白粉にて化粧し、西洋香水の匂ひ高く、西洋趣味にかなふた和洋取交ぜの服装を用ひ、指には黄金または宝石入りの指輪をはめ、西洋ハンケチなど携帯し、洋傘などさして、妖艶なる姿を長崎の市中に現し、貧家の娘たちに羨まれてゐたのであった。」という。(前掲、古賀。282頁)
- 71 古賀によると、「英人や仏人などの洋妾にして随分多額な所得を獲た者もあつたが、稲佐のラシャメンとは到底比較にならなかつた。それで、市郷の貧家の娘などは、稲佐のラシャメンたらん事を切望したものである。」とある。(前掲、古賀。284頁)
- 72 *Н. Бартошевский. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868. стр. 42.*

- 73 *M. Верн*. Современная Япония. М., 1882. стр. 45.
- 74 ちょんきな節は、万延元(1860)年ごろから流行した拳唄で、明治初期にいたって横浜のチャブ屋あたりで外国船員相手に「ちょんぬげ」とか「ちょんきな踊り」として盛んになったという。「ちょんきな」は「一寸来な」、「ちょんの間」といった意味であるという。歌詞は、「ちょんきなちょんきな、ちょんちょんきなきな、ちょんが、なのその、ちょんがよやさの」とされる。(『遊里と岡場所、見世物と遊戯 性風俗 [] 社会編 - 講座日本風俗史 - 』雄山閣 平成2 198頁)
- 75 *H. Гарин*. По Корее, Маньчжурии и Лясодунскому полуострову. Карандашом с натуры. Спб., 1904. стр. 338. Н.ガリン 本名はミハイロフスキー。ニコライ・ゲオルグヴィッチ・ミハイロフスキー(1852-1906)作家、シベリア鉄道建設の際の技術師で、旅行も多い。
- 76 *K. Куприанов*. От Глазгова до Нагасаки. // Природа и Люди. Спб., 1895. №52. стр. 828. “クピー・マーマ・リュスキー(купи мама рюски)”は、“買って、ママ、ロシア人”の意であると思われる。
- 77 *H. Бартошевский*. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868. стр. 40.
- 78 *Великий князь Александр Михайлович*. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 89. 大公の“妻”は、ロシア人士官たちから“我が大公妃”と呼ばれ、料理屋で敬意を払われたという。(стр. 89.)
- 79 *Князь М. Н. Волконский*. О-сшька-сан. // Пушкинский сборник. Спб., 1899. стр. 393-395. 397-399.

参考文献

(日本語文献)

- ウィルキンソン、エンディミヨン著、徳岡孝夫訳『誤解 日欧摩擦の歴史的解明』増補改訂版 中央公論社 1982
- 古賀十二郎著、長崎学会編『丸山遊女と唐紅毛人』後編 長崎文献社 昭和43
- パークバフニ、ブライアン『蝶々夫人を探して 歴史に見る心の国際交流』かもがわ出版 2000
- 原勇『女侠 長崎のお栄さん』原静枝発行 昭和42
- 松竹秀雄『ながさきの対岸 稲佐風土記』長崎文献社 昭和60
- 保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』増補 朝日新聞社 1990
- ループ、ゲイリー.P著、庄山則子訳「一五四三年から一八六八年の日本における異人種間関係について 戦国および近世における人種混交と人種意識」脇田晴子、S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史 上 宗教と民俗 身体と性愛』東京大学出版会 1994
- 『遊里と岡場所、見世物と遊戯 性風俗 [] 社会編 - 講座日本風俗史 - 』雄山閣 平成2

(日本語非刊行史料)

『稲佐卜露西亜人』長崎県立図書館蔵

(露語文献)

- Александр Михайлович (Великий князь)* Книга Воспоминаний. М., 1991.
- Армфельт Г.* Корвет "Варяг" Воспоминания из кругосветного плавания 1863, 1864, 1865, 1866, 1867 г. Спб., 1867.
- Бартошевский Н.* Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868.
- Верн М.* Современная Япония. М., 1882.
- Виноградов А.* В дальних краях. Путевые заметки и впечатления. М., 1901.
- Волконский М. Н.* О-сшька-сан. // Пушкинский сборник. Спб., 1899.
- Гарин Н.* По Корее, Маньчжурии и Лясодунскому полуострову. Карандашом с натуры. Спб., 1904.
- Гребенщиков М. Г.* Путевые записки и воспоминания по Дальнему Востоку. Спб., 1887.
- Зарубин И.* Вокруг Азии. // Русский вестник. Спб., 1881. №5.
- Кнорринг Ф. И.* Через Америку и Японию. Путевые очерки. Спб., 1904.
- Куприанов К.* От Глазгова до Нагасаки. // Природа и Люди. Спб., 1895. №52.
- Краснов А. Н.* По островам Далекго Востока. Путевые очерки. Спб., 1895.
- Крестовский В.* В дальних водах и странах. // Русский вестник. Спб., 1886. №2.
- Скальковский К.* Вокруг света. Срок шесть тысяч верста по морю и по суше. Путевые впечатления. Спб., 1881.
- Хоров* От Владивостока до Одессы. // Природа и Люди. Спб., 1897. №24.
- Черевкова А. А.* Брак и развод в Япоии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4.
- Шестунов А.* Вдоль по Япоии. Спб., 1882.
- Шрейдер Д. И.* Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988.